

あてもつてもなくとも…時流に乗った

外国人講師と談笑する青木辰二さん(中央)
—大阪市浪速区のイング本社

関西経営者列伝

イング
青木辰二 名誉顧問

第2章



幼い頃から体は丈夫な方で、陸上やテニス、体操などさまざまなスポーツに親しみました。熱が出た日でも途中から学校へ行かせるような母親のもとで育ったこともあり、小中高と12年間1日も学校を休まず、皆勤賞をもらったのは一つの誇りです。

英会話が上達したのは、高校のときに米国からの留学生と前後の席になったのが大きかった。よく一緒に遊びに行き、時にはけんかもしましたしね。昭和30年代から40年代、また外国がそれほど身近ではない時代でしたが、高校、大学とE.S.S.(英語研究部)に所属し、外国人の先生と日常的に会話できたことも上達につながりました。

将来の夢は、最初は外国航路の船長でしたが、視力の関係で難しかった。教員にもあこがれましたが、大学で免許を取るには夏休み返上で授業に出ないと単位が取れないし、それだと旅行に行けない、旅行の方が大事やなど。ただ、人に教える仕事には当時からひかれるものがありました。

旅行の方が大事 教員免許は断念

《大学卒業後、いったん企業に就職したが、翌年には退職し、生まれ育った堺市で英会話スクールを創設した》

英語力が生かせるだろうと考え、自動車部品を扱う貿易会社に入ったんですが、会社の悪口ばかり言っている先輩や同僚に嫌気がさして、一方で、独り立ちしたいという思いもあったし、脱サラしよう。昭和44年のことです。

大阪万博を翌年に控え「国際化」という言葉がはやり出した頃でしたが、ただそれだけで、確たるあても資金もつてもない。家族は大反対でした。「勘当や」とまで言われましたが、「ここでやらんと後悔する」と押し切りました。

まずは教室を確保しないとけない。町会長さんに「地域の国際化のためにも」とお願いし、地元の会館をただで貸してもらえらるようになりました。生徒募集は、手書きの案内書を回覧板で回してもらった。あとは講師です。英語には自信があるけど、外国人がいた方が説得力がある。海外経験があった友人に相談し、米国人女性のジャックリン・レオさんが来てくれることになりました。

ジャッキー(レオさん)は20代前半で、世界を回りたいという夢を持っていた。日本語は全く話せなかったけど、明るい性格で、近所のおばちゃんたちにもかわいがられました。

スタート時の生徒数は12人。小学生が中心で、幼児も社会人もいました。ジャッキーには1年間手伝ってもらいましたが、いただいた月謝は、彼女の生活費として全て

万博前年に開講 生徒は続々増加

《万博開催に伴う英語熱の高まりもあり、生徒数は順調に増えた》

時流に乗れたのは幸運でした。外国人講師がいる英会話スクールはまだ珍しかったし、当初は大きなセールスポイントになった。南大阪を中心に、毎年教室が増えていきました。幼稚園や他都市の教室など外部へ教えに行く機会も増えた。万博で外国人が店に来るかもしれない、英語ができれば厚遇されるからと頼まれ、大阪・北新地のナイトクラブで勤める女性に教えていたこともありました。

子どもたちには「Tag(タグ)先生」と呼ばれてきました。「たつづ」という名前から取ったニックネームです。子どもたちにも「ジョン」や「アン」など自分の好きな名前をそれぞれ選ばせ、愛称で呼んでいました。そうすると先生と生徒という関係以上に親しみがわく。子どもたちが楽しく、自然と英語を学べるように心掛けたんです。この頃は1年で元日以外の364日働いていたけど、人が好き、教えることが好きだし、少しも苦にならないかった。同時に、いろんな方々の縁に恵まれたおかげで順調に歩めたこと、すごく感じます。



英会話スクールの講師に招いたジャックリン・レオさんと青木さん
—昭和44年

次回は18日に掲載